

[研究論文]

「土踊」の伝承と保存について⁽¹⁾

東元 りか

1. はじめに

鹿児島県無形民俗文化財「土踊さむらいおどり（二才踊にせ・稚児踊）」は、毎年7月23日に加世田市⁽²⁾竹田神社夏祭りで奉納されている。

旧薩摩藩領は、鹿児島城下と、103もの郷とよばれる居住地（武家屋敷群）に分かれていた。士族は、それら郷に分散して住み、郷の中心地区は「麓」といった。かつては、すべての麓にみられたといわれている武士踊⁽³⁾だが、現在において、毎年決まった期日に踊られるのはこの地区のみである（松原 1993：291-293）。現在、竹田神社で踊られる武士踊をさし、「加世田武士踊」または「土踊」といい、後方で称されることが多い（以下、本論では「土踊」と記述する）。

「土踊」は大人が中心に踊る「二才踊」と地元小学校児童（加世田小学校）が踊る「稚児踊」から構成されている。その歌詞は島津家中興の祖である日新公じっしんこう（島津忠良1492-1568）によって創作され、出陣の際にはその士気を高めるために踊らせたとも言われている。しかしながら、その由来についての明確な記述を文献にみることはできていない⁽⁴⁾。

民俗芸能の伝承を考えると、伝承がその伝統を形成する共同体に依存していることはいうまでもない。言い換えれば、その時代時代の芸能をとりまく環境や、人々の意識・行動といったものが相互的に影響し合う中で、変容しながらも維持されてきたものである。

「今」の地域社会と民俗芸能との関連性をみることは、伝承の維持と芸能の保存の方法論に繋がるものと考えられる。すなわち、芸能の伝承と保存のあり方には、どのような社会的維持⁽⁵⁾が作用しているかを明らかにしようというものである。これまでの「土踊」研究では、こういった社会的維持という側面からの、具体的事例に基づいた検証が充分になされてきたとはいえない。そこで、現在の「土踊」をとりまく現状を確認した上で、伝承者が芸能をどのように捉え、受け継いでいこうとしているのかを探っていくことにする。

本論では、第一に「土踊」が、どのような歴史的構築の上に成り立っているかを明らかにする（2. 「土踊」伝承地における歴史）。第二に、「土踊」習得の過程を明らかにすることによって、伝承の維持の方法を確認する（4. 伝承方法と実際）。第三に、「土踊」の担い手・保存会を含めた伝承組織の活動から、「土踊」の変容と伝承の方向性をみていく（5. 伝承組織と活動 6. 伝承者の意識と行動）。

2. 「土踊」伝承地における歴史

2-1. 地勢・祭り・芸能

加世田市は、鹿児島市から約45km、薩摩半島南西部に位置する。この地域は平安末

期別府氏が領有し、藩制時代には、島津宗家が直轄地、加世田郷 13ヶ村を形成していた。

現在、加世田市内で行われる祭りの中で、最大のものが竹田神社夏祭りである。県下三大祭の一つにも数えられ、毎年数万の人手がある。その他に、吹上浜で行われる砂の祭典、六月灯とよばれる夏祭りが各地区で行われる。講信仰に基づいた祭りや行事も多い。

芸能としては、土踊をはじめ、棒踊、カマンテ踊、太鼓踊（加世田各地区）、座頭踊（武田、舞敷野）、トッカケベイ（社付）、道楽踊（小松原）、ノンノコサイサイ（東山）、疱瘡踊・馬方踊（内布、小湊）等があげられる。

2-2. 竹田神社

「土踊」が奉納される竹田神社の前身は日新寺である。その起源は、室町時代、島津第9代忠国の5男国久が保泉寺を建てたところによる。永禄7年（1564）日新公は、その保泉寺を再建し、自身の菩提寺と定めて日新寺と改名した。明治2年（1869）の廃仏毀釈によって、明治6年には、日新公の坐像を御神体とし、竹田神社として社殿が造営された。

2-3. 土族と踊手

加世田「土踊」は日新公の御作であるという言い伝えに拠るとすると、創作年代は16世紀中ごろということになる。その当時の加世田土族の状況窺い知るような詳細な史料は見られないが、明治5年2月に書かれた加世田土族明細帳がある。そこから江戸末期における加世田郷士の状況を窺うことができる。当時、薩摩藩では、禄高4万石以上の者を軍服に服することを要していた。当時の男子人数は約3,000人であり、麓地区の土族の数は260人ほどであった。また、麓・内山田・津貫一帯に土族が多く住み加世田郷の半数以上を占め、加世田郷の中枢部であったことがわかる。麓地区の中央には別府城があった。

加世田再撰帳には、慶長17年（1612）から安政7年（1860）までの249年間に、歴代藩主及びその一族の加世田来訪の記録がある。それらの際、「土踊」が踊られていた記録が残っている。「土踊」の名称は時代によって変化しており、例えば、安永9年（1781）、衆中は外城郷士となり、更に天明3年（1783）には郷士となっている。その後、「衆中踊」は「郷土踊」という名称で記述されている。

3. 「土踊」の概要

3-1. 当日の進行

筆者が観察した2003年度の「土踊」当日の進行は、以下の通りであった。尚、保存会のメンバーから聴取したことによれば、この進行は例年と同じとのことである。

当日、「稚児踊」は本町公民館に、「二才踊」は加世田中学校に集合して、それぞれ支度を行う。その後、「稚児踊」は、太鼓と鐘を打ち鳴らす「道行」を奏しながら竹田神社へ

向かう。途中「二才踊」と合流し、「二才踊」を先頭に竹田神社へ到着する。「二才踊」が踊り終わると、続いて「稚児踊」が踊られる。終了後、「稚児踊」は再び道行を奏しながら稚児踊休憩所へ向かい、解散となる。

3-2. 踊の手順・内容

「土踊」の踊の手順と内容は、以下の通りである。踊手の受け持つ役割については、(4-2. 受け持つ役割の伝承)で詳しく記す。

神社の鳥居までくると、「二才踊」が横六列に並び、繰込みの準備をする。その間、「稚児踊」の「打切」の郷土、「郷土」、「稚児」、「モロ」、「カネ」の順に境内へ入り、拝殿に向かって左側に横一列に並び、「シメデコ」を鳴らす。それを合図に、「二才踊」の「ウタアゲ」が「エイエイ～」とトキの声をあげる。「稚児踊」は退場する。まず「先払い」が、横6列のまま、一步一步足を揃えるように、ゆっくりと拝殿の前へと進み出、左足、右手をつき拝礼する。3人ずつ、左右に分かれ、等間隔の距離をもって座につき、向かい合う。

先払いが座につくと、踊手はウタアゲを先頭に3列ずつ左右に分かれ、円を描くように進み出る。踊の隊列は本来、12列であったようだが、近年、及び2003年度は、6列であった。拝殿の正面で列の先頭が出会ったところで、ウタアゲが上の句を謡い始める。ウタアゲが上の句を歌うと、踊手全員が斉唱する。途中、頭上で手を叩いたり、飛び上がったたりする。円陣は、最後に横6列の元の隊列に組み直され、踊り終わると拝殿に向かって、左足、右手をついて拝礼する。その隊列のまま、鳥居のところまで退場した後、再び加世田中学校へと戻り、解散となる。

「稚児踊」は、「二才踊」が踊っている間、神社の脇に2列に並ぶ。「二才踊」の踊が終わると、境内の中へ進み出る。旗持ちを先頭に、2列縦隊の並びのまま、道行を奏しながら、境内の中心に一円の形を作るように歩く。並び順は、モロといわれる小太鼓とカネが隣り合い、その後ろに郷土、稚児といわれる太鼓持ちが1列で、さらに「歌児」は横3列の隊列を組んで続く。歌児の外側には、介添役がつく。円陣をつくり、左廻りに進む。鎧武者は、円陣の中を同じく左廻りに、ゆっくりと警護をするように2歩ずつ足を揃えるように進む。道行、打切太鼓であるシメデコが終わると、歌が始まる。足取りは、左足から踏み出し、一步一步足を揃えるようにして進む。以前には「稚児踊子供歌」の前に「大人歌」が歌われたようだが、歌える人がいなくなったため近年は歌われていない。稚児踊歌は、上の句をウタアゲが一人で歌い、下の句を稚児が歌う。ウタアゲは全部で3人、2番ずつ、マイクを持って歌う。1番から6番までであるが、その歌詞は隔年で入れ替わる。2番ずつ歌い終わると、打切太鼓をならす。

そのまま5~6周境内をぐるぐると廻る。歌が終わると再び道行を奏す。歌児が更に歩を速く進めると、一重だった円は二重へ変わる。拝殿に向かって左側にある大木を目印とし

て、打切の郷士を先頭に、拝殿を正面に3列横に並ぶ。「鎧武者」を最前列にして、前列から、郷士、稚児、モロ、カネ。3列目、4列目は歌児。最終列に介添役が並び、カネ、モロの合図により（モロ・カネが一度打ち鳴らす）左足、右手をついて拝礼する。再び、カネ、モロの合図で立ち上がり、横2列になって退場する。その際、道行を奏しながら進む。鳥居をくぐると、左手（二才踊演舞中の待機場所とは逆の）方向に進み、稚児踊り休息場所へと向かう。休息場所へ着くと、保存会会長や指導者の話を聞いて解散となる。

4. 「土踊」伝承の方法と実際

4-1. 音楽と振りの伝承

「稚児踊」の参加者は、本番約一ヶ月前から設定された練習日に、保存会の指導者（以下、指導者）から直接指導を受ける。指導者は、過去に踊った経験のある人や、長年稚児踊に関わってきた人など、主に定年を迎えた年齢層の人々で構成されている。初めに、室内で音楽を習得し、暗譜のできるようになった頃に、屋外で全体の振りを習得する。参加者には、役割ごとに練習用テープ（その当時、最も上手だと言われていた歌い手の歌謡を録音したもの、および指導者が手本を録音したもの）が配られるが、これは補助的なものであって、多くは設定された練習日の中で習得する。

まず、音楽の習得であるが、役割を大きく2つ（歌と太鼓）に分け、それぞれの部屋で、役割ごとの音楽を習得する。通し演奏ができるようになると、歌と太鼓は合流する。

太鼓の練習部屋では、正面左がモロ、右がカネとし、それを取り囲むようにコの字型で太鼓の打ち切りの郷士、郷士、稚児と正座で並ぶ。初期段階では譜を見ながら演奏する。この段階で、過去に参加経験のある児童のほとんどは、暗譜での演奏ができています。指導者（随時3~5名）と小学校の教員2名（以下、教員）が児童の周りにつき、個々の直接指導にあたる。指導者は、リズムに合わせて太鼓を叩く読み方（ $\overset{\text{ボ}}{\bullet} \overset{\text{ト}}{\bullet} \overset{\text{カネ}}{\bullet} = \text{♪♪♪}$ 、 $\overset{\text{カネ}}{\circ} \overset{\text{ボ}}{\circ} = \text{♪♪}$ 等）で以って口ずさみ、全体の統制をとる（テンポ・打ち方の指示）。児童は、それに合わせて太鼓を打つ。教員は、初めて参加する児童の横について音楽習得の補助にあたる。指導者がバチの持ち方、正しい叩き方のフォームの手本を見せると、児童はそれを見、真似て打つ。指導者は児童全体の習得状態を見ながら、個々の手をとって指導する。児童はしばしば、左右、正面の児童のフォームや、リズムを確認しながら、周りに合わせようとする。太鼓を打つタイミングが徐々に急ぐ傾向にあるため、音が揃わない。指導者がテンポを数えながら等間隔に打つよう、指導する。

歌（歌児・ウタアゲ）の練習部屋では、随時指導者が1~2名。ウタアゲは列先頭に3人並び、その後ろに歌児が、身長順に並んでいる。練習初期はボードに歌の譜（写真1）を貼り、指導者が手本を歌うと、それを真似て児童全員が歌う。それを繰り返すことで、音高、リズムを徐々に習得していく。節の回し方、声の出し方（凜と張るような声を、腹

音高、リズムを徐々に習得していく。節の回し方、声の出し方（凜と張るような声を、腹式呼吸によって出す）に細かに指導が入る。

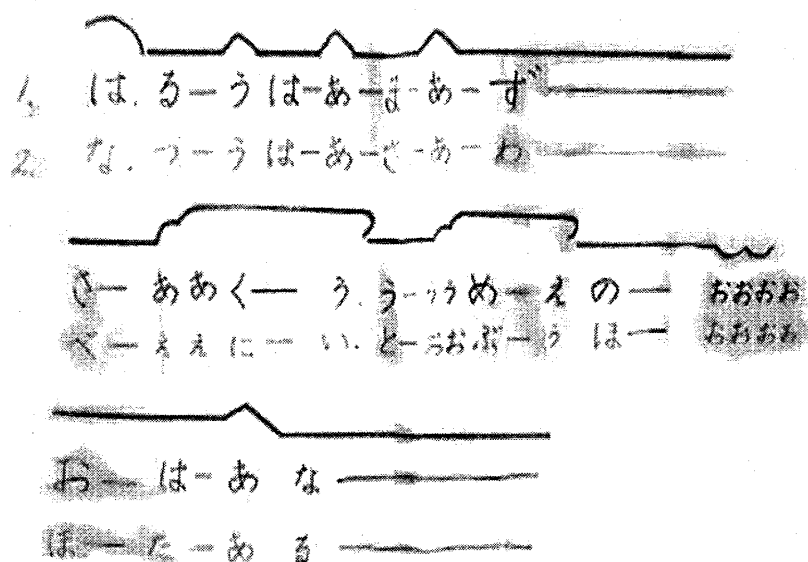


写真1 「稚児踊歌」の譜 1.2 番の歌詞。歌の練習部屋のボードに貼ってあり、歌児はこれを見ながら歌う。

練習 6 日目から歌と太鼓合流しての合同練習が始まった。太鼓に囲まれるように歌児が中央に立って歌う。音・リズムがとれるようになり、野外練習日程が近づくと、室内でも動きの習得にはいる。練習 6 日目に動き方について説明をし、手本を見せる。練習 7 日目、始めに指導者が説明と手本を見せた後、実際に児童に足の運び方（以下、ステップ）を模倣させる。ステップは必ず左足から始める。指導者はテンポを取りながら「左、右、左、右・・・」と口ずさみながら一緒に動く。児童一人を代表に、細かな動きを確認させる場面も見られる。練習 9 日目から野外練習に入る。始め、指導者が全体の動きを説明、手本を見せた後、それを模倣して児童が実際に動く。衣装は、汚れを防ぐ（「土踊」は奉納であり、心身・衣装共に精進することが望まれる）ため、本番当日にしか身に着けない。しかし、練習においても刀を脇に差して行うので、白帯を着用し、そこに刀を差す。郷土、稚児は、太鼓を持って歩く時、刀の先に肘をのせて支えとする。その際、肘が擦れるのを防ぐため、肘にタオルを巻く（練習時のみ）。ステップと、音の出し方に慣れてくると、太鼓を打つテンポが速くなりがちになり、「速くならないように、」と指導者の注意を受ける場面がしばしば見られる。指導者によると、「時代の流れで、昔と比べると今はせつかな風潮にあるから、ゆっくり打つという動きに慣れてないのかもしれない。」と、年々速くなりがちテンポについて語っていた。練習 13 日目、鎧武者も合流しての練習。

地区では約5日前から練習が始まる。練習初日には、衣装や踊の概要について説明がある。本番当日の朝、それぞれの地区から参加者が一同に集まり、初めて全員で踊ることになる。「二才踊」では、まずは、振りの習得が優先され、歌謡は、年月をかけて徐々に習得される。伝承方法としては、歌謡と簡単に動きを記した譜があるが、それを使用することは殆どなく、口頭伝承（第一次口頭性）によって習得される。

このように、伝承の形態としては、個人から個人への指導、というよりも、指導者から集団・個人へ、経験者から個人へ、というように、集団の中で相互的に習得していくことが明らかになった。習得の遅い者は、周りに合わせようと注意を配り、時には指導者や教員から個人指導を受けることで徐々に習得していく。全体を率いる立場にある経験者や高学年の児童は、さらに指導者から指導を受けることで、伝承の細かな部分をも習得し、全体はまた、それに合わせていく。それが繰り返され、年数を重ねることで、「土踊」の形態が保たれていっている。

4-2. 受け持つ役割の伝承

「稚児踊」では、踊手それぞれが太鼓や歌などを担当する（以下、役割⁶⁾。受け持つ役割は、踊り手の体格に大きく関わっている。郷土、稚児は同じく太鼓担当であるが、太鼓の鳴らし方が多少異なる。郷土は稚児よりも力強く打ち鳴らすことが要求されるため、主に体格のしっかりしている5・6年生が受け持つ。郷土の中でも、特に打切の役割を担う児童には、さらにそれが要される。郷土は、腕を目線の先に真っ直ぐに伸ばした位置で、太鼓の脇の紐を握るように持ち、歩く。太鼓を鳴らす時は、右腕を肩の辺りから振り下ろす。頭には、角のでた練鉢巻をつける。稚児は、郷土より短めの刀を帯刀し、白鉢巻を頭の上で蝶々結びにし、顎にかける。太鼓は、肘を少し曲げ、刀の先に肘をのせるように構えて持つ。太鼓を鳴らす時は、肘を曲げた位置から打つ。モロとよばれる小太鼓とカネは、全体のリズムとテンポ設定を司っているため、よりリズム感が良いとされる児童が選出される。歌児は、2~4年生から構成されていて、その中でも声と音程感覚が良い児童3人がウタアゲとなる。モロ、カネは、6年生の補助的な形で5年生も受け持ち、次年度に備えている。

2003年度調査においては、「二才踊」の20代以下の参加者は5人、ほとんどが70歳代であった。参加者の大半が経験者であり、10年以上、毎年必ず参加している、という人が多い。受け持つ役割は、先払い（総指揮者、組体の見張り役であり、踊の振りを間違えた者を敵の間者とみなす。）は、各地区持ち回りで参加者を決めることもあったようだ⁷⁾。ウタアゲ（マイクを持ち、歌の上の句を歌う。ウタアゲは、二才踊の進行を統制する役割を担う。）は、親から子へ、子から孫へと、その役割を代々引き継ぐ傾向にある。「二才踊」は隊列を組み、当日の全体練習で隊列表が作成される。昨年度の隊列表をもとに組まれる

ため、その並び順に大きな変動はみられない。並び位置も、親から子へと引き継がれる傾向が多くみられた。



写真2 左がモロ、右がカネ



写真3 ウタアゲ（マイクを持つ）、その後が歌兒

4-3. 衣装の伝承

「稚児踊」では、本番3日前、役割ごとの衣装と説明書が稚児踊り参加者に手渡される。竹田神社拝殿に保管されている衣装は、この時のみ外へ出される。「稚児踊」の参加者は全員がここから借りる。

「二才踊」では、参加者の多くが自前の衣装で参加する。かつて郷土は、家紋の入った陣羽織を着て参加していたが、現在、保存会から貸し出す衣装には島津家の紋が記されている。代々、着継がれている衣装を身につける踊り手のものには、家紋が入っているものが多く見られた。中には100年以上になるものもある。

5. 伝承組織と活動

5-1. 保存会

第二次世界大戦中、中断していた「土踊」の復活を訴え、昭和26年、稚児踊保存会を設立。初代加世田市長が積極的に保存会設立へ働きかけ、初代保存会会長も担ったという。組織役員は、会長一名、副会長一名、顧問、理事、指導者、賛助会員、協賛員若干名、監査三名、保管修備若干名、会計書記二名からなる。任期は2年である。会は、加世田小学校校区民を以って構成され、「稚児踊」の稚児は加世田小学校児童のうち適度に選出されている。総会は毎年1回3月に開かれ、役員を選出、規約の改正、夏祭企画運営、反省が行われている。保存会の経費は、各小組合の出金、市教育委員会の寄付、その他寄付で以っ

われている。保存会の経費は、各小組合の出金、市教育委員会の寄付、その他寄付で以ってこれに充てられており、加世田市からは毎年、文化財交付金として8,000円が出資されている。指導者は、戦前及び昭和26年以降に踊った経験のある人や定年を迎えた年齢層の人々で構成されており、保存会側としては、平日の練習に参加できるような若い人々にも、指導者として関わってもらえるよう呼びかけを行っている。保存会設立以降、加世田小学校児童に「稚児踊」参加を呼びかけ、現在も立候補、教員の推薦で小学校児童が参加しており、毎年60～70人の参加者を集めている。また小学校教員の全面協力を得ている。教員は、できるだけ多くの参加者が出るよう呼びかけをし、毎回練習に参加して児童をまとめ、本番も介添役として参加する。

「二才踊」の保存会である加世田武士踊委員会は、昭和32年に設立。会は、加世田市、大浦町、笠沙町（旧加世田郷）出身者で以って構成され、組織役員は、委員長（加世田市長を委属する）1名、副委員長2名、理事若干名、監事1名、庶務会計1名からなる。任期は2年である。総会は、毎年7月初旬に開催され、そこでは事業計画、決算及び予算、役員改選、規約の改廃に関する事項、その他について、話し合いが成されている。会は竹田神社内の社務所で行われている。会の経費は、会費、補助金、寄付金を以ってこれに充てられており、加世田市からは毎年、文化財交付金として12,000円が出資されている。また、「二才踊」参加者には、毎年「出演謝礼金」として一人当たり500円ずつ充てられている。

昭和55年の加世田市武士踊委員会記録を参考にすると、委員会の要望として、「市職員も小供のころ踊った者についてはできるだけ参加させ、当時他の係員に配置しないように」「士族・平民の区別は十数年前から云わずに、踊りに参加する者は歓迎している」、昭和63年には、「士族だけの踊りではなく、全員で踊れるよう脱皮すべきである（徐々に理解させていく）」とあるように、年々、特に「二才踊」参加者の減少を問題として意識し、改善する努力を行っている。現在は「稚児踊」に参加した児童を中心に、加世田中学校に参加者募集を呼びかけている。平成9年より、毎年、4～8人が参加している。今後、旧加世田郷地域の中学校に参加を呼びかける努力をする予定であるという。参加者減少の理由の一つとして、「(衣装を)新調してまで(自費で)は踊りたくないというのも参加者の減少になっているのではないか。(昭和55年武士踊委員会記録参照)」とあげられており、現在、衣装を持たない者には、武士踊委員会から貸出を行っている(昭和42年の二才踊打ち合わせ事項を参照すると、陣羽織一着2,500円也とある)。

5-2. 行政機関・公共機関

行政機関である市役所は、竹田神社夏祭り市民慰安大会の運営を行っており、夏祭りプログラムの一つである「士踊」(特に二才踊)の運営、実行の補助も行っている。現在は、

加世田市福祉課の職員が担当となり、「二才踊」当日の進行、準備、補助等を受け持っている。また、武士踊委員会の会議にも参加し、その記録も行っている。担当者は、市役所の職員の中から推薦で決定し、担当になると何年にもわたってその役割を担っている。

昭和42年（日新公400年祭）をもって、竹田神社夏祭りは市民慰安大会となることで市から補助金（稚児踊8,000円、二才踊12,000円、竹田神社70,000円）が出るようになった。

昭和36年度より竹田神社夏祭り市民慰安大会のプログラムを参照すると（二才踊保存会所蔵）、新聞社・新報社後援の柔剣道大会や銃剣道が開催されており、夏祭りの宣伝も新聞社やテレビ局が協力をしていた。昭和48年の竹田神社夏祭り市民慰安大会行事計画（案）備考欄には、「南日本テレビが開局20周年記念行事（8月17,18,19日）県下各市町村の文化財的な郷土芸能を広く公開したい（鴨池陸上競技場）」とある。平成12年には、鹿児島市市民文化ホールで開かれた「ふるさとの太鼓踊り」で「土踊」も公演に参加した。南日本放送局（MBC）は、その他にも薩摩琵琶や民謡等の郷土芸能を取り上げた事業を行い、郷土芸能を推奨する活動を行っている。

5-3. まとめ

保存会発足以来、保存会の積極的な活動により、行政の協力、地域住民（小学校、中学校）の協力を得て、芸能の伝承組織体は着実に確立していっているように見える。しかし、保存会存続には、後継者の育成はもちろんのこと、衣装や練習にかかる経費をいかに集めるかが重要な問題となっている。竹田神社夏祭りが市民慰安大会と位置づけられることによって、加世田市から補助金が出るようになったこと、文化財交付金が出るようになったことで、以前危惧していたような、運営資金不足による「土踊」存続の危機からはとれあえず免れられたようではある。しかし運営のほとんどが寄付金によって賄われているのが現状であり、保存会は寄付金集めに頭を悩ませている。

6. 個人の意識と行動からみる「土踊」の伝承

個の捉え方には、個人史という立場からの研究、すなわちその文化を担う個人が積み重ねてきた音楽経験をみることで伝承の保持を考察する研究もある⁶⁾。ここでは「土踊」という伝統を担う社会的最小単位としての個人が、「土踊」をどのように捉え、伝承体がどうあるべきと考えているか、個人の意見を参照したうえで、伝承組織の今後の方向性を探ることとする。保存会構成員へ質問紙調査及びインタビューを行い、その結果からの考察である。

「土踊」には、禄高の高い順から隊列に加わったといわれており、参加できるということは士族としての誇りを象徴するものでもあった。そういった背景から、参加者の多くは

郷土の子弟であることに誇りをもって踊ってきた。しかしながら社会構造の変化に伴って、担い手の多くが士族の子弟のみで踊る、という形体を保っていくのは難しいと感じ始めている。「武士踊」は、現在加世田にしか伝承されていないことや、「武士踊」の中でも日新公の御作のものであることが加世田の誇りとなって、伝承を担う義務とその責任とを伝承者自身が見出し、さらには芸能を活性化しようという意欲へと結びついてきている。日新公の教えや誇りが今も教育観として強く残っている土地だからこそ、「土踊」が受け継がれてきたといえる。

保存会だけでなく踊り手が、踊り手同士が積極的に参加を呼びかけていくことも、「土踊」伝承を守る方法の一つであるとし、現在、保存会側や参加者の一部はその活動を行っている。そういった動きを広げることは、加世田という地域社会における「土踊」という芸能の活性化に繋がるのではないかと考える。

7. 結び

本論では、社会的維持という側面から「土踊」伝承の方法を検討してきた。「土踊」においては、伝承組織が中心となって社会の変化に対応し、芸能の維持が可能な脈絡を見出してきた。特に伝承組織体そのものが安定性を確立したことで、伝承と芸能自体の保存が現実性を増してきている。加世田という土地においては、「土踊」の創作由来と歴史的背景とが相成って、社会的に維持されやすい環境であったことも、大きな要因のひとつであったと考える。

註

- (1)本稿は、2003年に提出したお茶の水女子大学人間文化研究科修士学位論文『「土踊」伝承と保存について』に加筆・訂正を加えたものである。
- (2)加世田市は、2004年11月、市町村合併により南さつま市の中に位置づけられた。この論文は、合併前の2003年の調査に基づいているため、加世田市と表記する。
- (3)「武士踊」は、太鼓踊の一種であるが、農民が踊るものと区別し、士族が踊るものを「武士踊」という。「ぶしおどり」「さむらいおどり」「むしゃおどり」などといわれる(松原1994)。
- (4)「土踊」を含めた武士踊を記録した報告、それらをもとにした分析的研究、伝播研究は、(村田1961)(松原1993)、(塩田1983)(森田1983)の論考にみられる。
- (5)Timothy Riceは、民族音楽学研究のモデルとして3つの要素「歴史的構築」「社会的維持」「個人の創作と経験」(徳丸1996)をあげている。
- (6)2003年度、「稚児踊」参加者は76名、「二才踊」は60名であった。昭和36年からの参加者数推移、役割と学年の内訳は、(東元2003)を参照されたい。
- (7)武士踊委員会記録による。
- (8)加藤2001、2003の研究。

《主要参考文献》

鹿児島県維新史料編さん所

1980 『鹿児島県史料 旧記・雑録後編1』鹿児島：鹿児島県維新史料編さん所。

加世田市

1986 『加世田市史 上・下巻』加世田市；鹿児島県：加世田市史編さん委員会。

加世田市教育委員会（編）

1964 『加世田市誌 下巻』加世田市；鹿児島県：加世田市教育委員会。

1990 『加世田の歴史と文化財』加世田市；鹿児島県：加世田市教育委員会。

加藤 富美子

2001 『小浜島における民俗音楽の伝承と個人の役割』2001年お茶の水女子大学人間文化研究科博士学位論文博乙第165号。

2003 「個人史からとらえた小浜島の音楽伝承」『音楽学』第49巻第1号：18-32。

塩田 甚志

1983 「武士踊（土踊・武者踊）由来についての考察」『鹿児島民俗』第77号：70-72。

相徳 隆

1979 『ふるさと加世田の史跡』鹿児島：加世田市教育委員会。

1992 『日新公生誕五百年記念誌』加世田：日新公生誕五百年記念事業実行委員会。

徳丸 吉彦

1996 『民族音楽学理論』東京：放送大学教育振興会。

鳥集 忠男

1991 『南九州の歌謡』宮崎：鉾脈社。

内閣統計局

1920-2000 『国勢調査報告 第1回-第17回』東京：日本統計協会。

東元 りか

2003 『「土踊」伝承と保存について』2003年お茶の水女子大学人間文化研究科修士学位論文。

藤井 知昭（編）

1985 『日本文化の原像を求めて 日本音楽と芸能の源流』東京：日本放送出版協会。

松原 武実

1985 「加世田市の郷土芸能と大浦町の太鼓踊」『南日本文化』第17号：187-232。

1993 『南九州歌謡の研究』東京：第一書房。

1994 「南九州の武士踊歌謡」小島 美子；藤井 一雄（編）『日本の音の文化』東京：第一書房：291-313。

村田 熙

1961 「土踊（加世田市竹田神社）」『鹿児島県文化財調査報告書 8』78-86.

森田 清美

1983 「‘御関狩并土踊由緒糺方被仰渡候しらべ留文書’について」『鹿児島民俗』第77号：
73.

渡辺 盛衛

1910 『島津日新公』東京：啓發舎.

○加世田稚児踊保存会が所蔵する資料

1951 「加世田稚児踊保存会規約」加世田稚児踊保存会.

1985 「稚児踊り大人歌昭和60年奉納」加世田稚児踊保存会.

1995 「加世田稚児踊鐘太鼓拍子」加世田稚児踊保存会.

2001 「平成13年子供歌」加世田稚児踊保存会.

○加世田二才踊保存会が所蔵する資料

1970 「鮫島 純夫譜 二才踊り歌」加世田：鮮明堂印刷株式会社印刷.

1975 「二才踊り歌」加世田二才踊保存会.

1998 「復刻・嘉永四年辛亥九月 加世田土躍歌」

2002 「加世田二才踊保存会規約改正」加世田二才踊保存会.

○加世田市役所福祉課が所蔵する資料

『二才踊関連史料』

《史料》

発行所・発行年不明（以下は復写。原本は加世田市歴史資料館所蔵）

『加世田再撰帳 一卷（一）』

『加世田再撰帳 一卷（二）』

『加世田再撰帳 二巻（一）』

『加世田再撰帳 二巻（二）』

『加世田再撰帳 三巻（一）』

『加世田再撰帳 三巻（二）』

《映像・音響資料》

加世田市教育委員会

2002 『竹田神社夏祭り』 VHS 2002/7/23

東元 りか

「土踊」の伝承と保存について（東元）

2003『竹田神社夏祭り』 VHS 2003/7/23

2005『竹田神社夏祭り』 VHS 2005/7/23

お茶の水女子大学卒業。同大学院博士前期課程演奏学（ピアノ）修了。現在、同大学院人
ひがしもと りか